黒田清輝《ブレハの少女》の名づけをめぐって

貝塚　健

石橋財団ブリヂストン美術館が所蔵する黒田清輝(1866-1924)の油彩画作品《ブレハの少女》(fig.1)は、黒田が滞仏中の1891年9月、久米桂一郎(1866-1934)とともに英仏海峡に浮かぶブレハ島に遊んだときに制作された人物画である。しかし、黒田存命中に発表されたことはなく、その作品名《ブレハの少女》がそう名づけられ定着するのは、第二次世界大戦後の1954(昭和29)年まで待たなくてはならない。それ以前は、「赤髪の少女」などと呼ばれていた。混同を招きやすいのだが、現在《赤髪の少女》の名で呼ばれている同時期の黒田作品(fig.2)は、東京文化財研究所に所蔵されている。この作品がそう呼ばれることが定着したのも1954年前後であり、それ以前は「少女の後姿」「処女後姿」また逆に「ブレハの少女」などと呼ばれていた。

fig.1
黒田清輝《ブレハの少女》1891年、
石橋財団ブリヂストン美術館

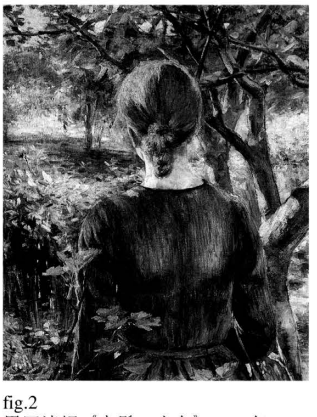

fig.2
黒田清輝《赤髪の少女》1892年、
東京文化財研究所

この2作品はともに、黒田の滞仏中に林忠正(1853-1906)に譲渡され、林没後の売り立てで山中商会(山中定次郎)へ、黒田の没後になる山中商会の売り立てで黒田清輝夫人照子(黒田種)の手に渡っている。ブリヂストン美術館は黒田照子から《ブレハの少女》を1952年に購入した。2作品の名づけに決定的に関与したのは、黒田照子および隈元謙次郎だと考えられる。こうした数奇な来歴をたどり、名づけの変遷や異同を整理・比較することによって、黒田清輝研究史のひとつの側面を浮き彫りにしたい。以後、混同を避けるために、現在《ブレハの少女》とされている作品を「BMA作品」、《赤髪の少女》を「東文研作品」と呼ぶことにする。

BMA作品は、タテ80.6センチメートル、ヨコ54.0センチメートル、フランス寸法25号P型のカンヴァスに描かれた作品である。画面にサインはない。向かって左から光線が入る室内に、十代前半と見られる一人の少女が壁に凭れて立っている。胸の前にある両手には、明るい黄色のハンカチのような布を持たせ、少女の前には椅子が一脚あり、その上には大きく割れた碗が載っている。観者を見詰める少女の眼差しは鋭く、赤毛の髪は乱れている。少女の服装は粗末で、室内も調度などは置かれていない。こうしたモチーフを荒々しい筆触で黒田は描いていて、その筆遣いと色彩は、黒田の表現主義的な一面を雄弁に語っている。

この作品は、1986(昭和61)年、創形美術学校修復研究所の三ツ山三郎によって修復された。三ツ山による修復前の調査によって分かったことのうち、制作経緯に関わる重要事項は次のとおりである[1]。まず、裏面を、赤色フィルターを使用して撮影したところ、「S」と「K」の二文字を重ね書きしたサインが現れた。「S. K.」は、1891年前後に黒田清輝が制作した油彩作品にたびたび使われたサインである。この重ね文字の天地の方向は、現画面とは異なり、横長の画面として書かれたものである。第二に、「X線合成写真の観察からは作品の下に弧形の一部分と思われる形と椅子の背もたれのようなアーチ形の映像が見られ、この映像

は現在の図柄とは別の絵と思われる」(fig.3)。この古い最初の図柄は、おそらく裏面のサインの向きに呼応して横長の絵として描かれていたものと考えられる。第三に、「画面四隅と左右中程にコマ穴がそれぞれ一箇所ずつあいていた」。コマ穴とは、同型のカンヴァスを2枚合わせて持ち運びする際に、画面が重なりあわないようにカンヴァスの四隅などを固定するために打つ鋲によって開けられた穴のことである。風景画にしばしば見られる。コマ穴の存在は、この作品が室内画であるにも関わらず、アトリエ外で制作され、画面が半乾きのうちに移送させなければならなかったことを意味している。

また、作品の裏面には、展覧会の出品票が貼付されている。記載内容は次の通りである。

黒田清輝先生遺作展覧会　1924
番号　第貳九九号
画題　赤髪の小女
御所蔵者　山中定次郎　殿

これは後述する、1924(大正13)年11月に開催された「黒田清輝先生遺作展覧会」のときの出品票である。

BMA作品が初めて記録にのぼるのは、1908(明治41)年、林忠正が亡くなったのちのコレクション売り立ての際に、林の甥、長崎周蔵によって編まれた『林忠正蒐集西洋絵画図録』である。以下の6点の黒田作品が記載されている。

89　ラムプニ二子供
90　赤髪ノ処女
91　女針仕事
92　処女後姿(半身)
93　河岸
94　画工モデル

fig.3
《ブレハの少女》修復前のX線合成写真

作品図版が掲載されていて同定することができ、「89　ラムプニ二子供」は現在、公益財団法人ひろしま美術館が所蔵する《洋燈と二児童》、「90　赤髪ノ処女」はBMA作品、「91　女針仕事」は石橋財団石橋美術館が所蔵する《針仕事》、「92　処女後姿(半身)」は東文研作品、「93　河岸」は現在所在不明、「94　画工モデル」は鹿児島市立美術館が所蔵する《アトリエ》であることが分かる。以後、本稿では、《針仕事》を「IMA作品」、《アトリエ》を「鹿児島作品」と呼ぶことにする。

これらの黒田作品が林忠正のコレクションに入ったのは、黒田の滞仏中のことだろう。BMA作品は、フランス製と見られる額縁に装着されており、林がフランスでその好みにあわせて額装したと考えられる。後述するように、BMA作品、東文研作品、IMA作品、鹿児島作品は1932年の段階で同じデザインの額縁に入れられており、フランス滞在中のいずれかの時期に林によって一括して額装されたものと思われる。

その譲渡の時期については、黒田の、1891年11月6日付、グレー発信、母宛封書に、次のような記述がある（下線部分は引用者）。

わたしはこのまへのびんから申あげましたとうりこのごろハびんぼうをしきつてをりこの三日の日のてんちようせつニぱりすにでかけましたときにハもうほんとうニさいふがかるくなつてしまいどうしてもだれかニおかねをかりなけれバこゝのいなかニかへつてくることもまたぱりすニをることもできないようニなりましたがどうもひとニかねをかりることハあんまりおもしろくございませんからいろいろかんがへました　どうしてもかいたゑでもうるよりほかニおかねのでどころハございませんのでとうとうぱりすニもつてをるだけのゑをちようど六まいほどはやしといふひとのところニもつていきましてその六まいのうちからいゝのだけ二まいほどにつぽんのおかねで五十ゑんばかりでかつてもらいましたまづこれでちよつとあんしんいたしましたそのはやしといふひとハここでしようばいをしてをりましてなかなかりつぱニくらしてをりあぶらゑがたいそうすきでわたしのきようしんくわいニだしましたゑをかをうとゆつたのもそのひとです[2)]

1891年11月3日から5日にかけての間に、パリで手許不如意に陥った黒田が、パリのアトリエにあった6点を林のもとに持参し、そのうち2点を購入してもらったことが記されている。後述するように、BMA作品は、この年9月のブレハ島旅行中に制作されたもので、ブルターニュのブレハ島から、グレー=シュル=ロワンではなくパリのアトリエに持ち帰っていたはずである。おそらくBMA作品は、このとき林が購入した2点のうちの1点だろう。またこの文面から、林がこのとき初めて黒田作品を購入したことが分かる。

ちなみに林が購入したいと申し出た「きようしんくわいニだしましたゑ」とは、この年の春、サロン・ド・ソシエテ・デ・ザルティスト・フランセに入選した《読書》(東京国立博物館蔵)のことで、これに関しては、黒田の1891年8月28日付、グレー発信、父宛の封書に次のような記述が見える。

> 共進会へ受取られ申候額ハ林と申当地にて日本古道具商を致し居候人買入度申候得共友人等日本へ送る方よろしからんと深切ニ申呉れ候間即ち其通り都合致し候　右の林氏が運送方等引受け呉れ候[3]

林が購入することを諦めて、代わりに《読書》の日本への輸送手続きを代行してくれたことが分かる。

林は、1892年5月に日本へ向けフランスを発っており、黒田も翌1893年6月にフランスを離れているので、林が複数の黒田作品を購入したのは、1891年11月から翌年5月までの6カ月間に行われたのではないかと思われる。

さて、この黒田から林へのBMA作品譲渡の際、黒田が作品名を明示しただろうか。作品制作の背景や経緯についてなんらかの情報は伝えただろうが、具体的な作品名はこのときなかったのではないかと思われる。『林忠正蒐集西洋絵画図録』に見える作品名も、林あるいは長崎によるものではないだろうか。「黒田清輝日記」もこの時期の部分は欠落していて、『林忠正蒐集西洋絵画図録』の編集に黒田がどの程度関与したのかはよく分からないのだが、おそらく、ほとんど関わっていなかったのではないかと想像される。

林忠正コレクションの売り立てを国内外で行ったのは山中商会(山中定次郎)だった。数次にわたる売り立てを経て、山中の手許に残った黒田作品は4点だった。

ついでBMA作品が公開されたのは、1924(大正13)年11月5日から15日まで、東京美術学校で開催された「黒田清輝先生遺作展覧会」においてである。その目録に、山中定次郎所蔵作品として以下の4点が記載されている。写真図版はない。

貳九八	アトリエ	一八九〇	山中定次郎殿
貳九九	赤髪の小女	一八九二	仝
参〇〇	針仕事	一八九一	仝
参〇壱	ブレハの小女	一八九二	仝

この記載は、BMA作品の裏面に貼付された出品票のものと一致する。この時点でBMA作品は、「赤髪の小女」と呼ばれ、1892年の制作だと考えられていたことが分かる。

重要なのは、この遺作展に関する久米桂一郎の評である。『中央美術』のインタビュー記事で以下のように述べている(下線部分は引用者)。

> 八室は大体に於て日本で描かれたもの丶やうであるが、三〇一(ブレハの少女)、二九九(赤髪の少女)などはさつき話したブルタアニユの北海岸に於る製作で二九九はその題の示す如くモデルは真赤な髪を持つた百姓の子供であつたがその髪が面白いといつて描かれたものである。随分しつかりとした出来ばへと思ふ。[4]

黒田はブレハ島を二度、久米とともに訪れている。最初は、1891年9月11日から30日まで滞在した。二度目は翌1892年8月27日から9月17日までである。同行し目撃した久米が、黒田がBMA作品をこの地で描いたことを証言していることになる。現在、BMA作品の制作年が1892年ではなく、1891年の作品だと推定される根拠は、黒田の、1891年9月24日付、ブレハ発信、父宛のハガキに以下のような記述があるからである(下線部は引用者)。

> 御全家御揃益御安康之筈奉大賀候　次ニ私事未ダ此の島ニ居り毎日子供など雇ひ勉学罷在候間御休神可被下候[5]

黒田のいう「勉学」とは作品制作に励むことをさす。9月24日前後の数日間、黒田が現地の子どもをモデルにして人物画を制作していたことが分かる。黒田の盟友でともに東京美術学校を支えた久米の、信頼に足る貴重な証言が、黒田のハガキ

の記述によって裏付けられている。ブレハ島旅行の際に制作され、半乾きのうちにパリに移送しなければならなかったことになるので、前述したコマ穴の説明もつく。

ちなみに、1984(昭和59)年、久米桂一郎の著述集『方眼美術論』が編まれたとき、上に紹介した久米の証言は以下のように改変されて収載された(下線部分は引用者)。

> 「ブレハの少女」「赤髪の少女」などはさつき話したブルタアニユの北海岸に於る製作で「赤髪の少女」はその題の示す如くモデルは真赤な髪を持つた百姓の子供であつたがその髪が面白いといつて描かれたものである。随分しつかりとした出来ばへと思ふ。[6]

この時点ではすでに、BMA作品が《ブレハの少女》、東文研作品が《赤髪の少女》となっていたはずで、編者が両作品の作品名の異同について把握していなかったことがうかがえる。久米がコメントしたのはBMA作品でなければならない。

遺作展の翌1925(大正14)年、和田英作の編集になる『黒田清輝作品全集』が審美書院より刊行された。作品リストには以下のように記載されている。

二六八　アトリエ　　一八九〇
　　山中定次郎君
二六九　赤髪の小女　一八九二　同
二七〇　針仕事　　一八九一　同
二七一　ブレハの小女　一八九二　同

この画集にはモノクロの作品図版がついていて、それぞれ、鹿児島作品、BMA作品、IMA作品、東文研作品と同定できる。

山中定次郎はこれらを、1932(昭和7)年に手放すことになる。売り立てのための「世界古美術展覧会」が、11月25日から27日まで、日本美術協会と常盤花壇で開催された。このときの図録『世界古美術展覧会』には、以下のように記載されている。

三八五　画家トモデル
三八六　赤髪ノ少女
三八七　針仕事
三八八　少女ノ後姿

額縁付きの写真図版が掲載されていて、それぞれ、鹿児島作品、BMA作品、IMA作品、東文研作品と同定できると同時に、4作品の額縁が同じデザインであることが分かる(figs.4, 5, 6, 7)。前述のように、この額は林忠正によってパリで一括して取り付けられたものだろう。

この林忠正旧蔵の4作品のうち、鹿児島作品、

fig.6
『世界古美術展覧会』より(IMA作品)

fig.4
『世界古美術展覧会』より(鹿児島作品)

fig.5
『世界古美術展覧会』より(BMA作品)

fig.7
『世界古美術展覧会』より(東文研作品)

BMA作品、東文研作品を入手したのが、黒田の未亡人照子夫人だった。森口多里が1933年8月の『洋画研究』の記事で次のように述べている。

> 黒田の「少女の後姿」、「画家とモデル」及び「赤髪の少女」の三点は昨冬の山中商会の売立に出たから知つてゐる人も多いであらう、それを未亡人が買ひ取られたのである。いづれも滞仏中の作で、強い筆触と澄明な色調とを特色とし、「少女の後姿」では緑葉を透かしてくる外光の効果が強く美しく描かれている[7]。

照子夫人がこのときどのような意図で、知り合う前の黒田の初期作品を購入したのだろうか。その後まもなく、黒田の顕章を目論む照子夫人の意志が示される。そしてそれは、第二次世界大戦後になってから、より明確になってくるのである。

ここまでのところで、BMA作品と東文研作品の作品名の異同を確認しておこう。BMA作品は、用字・表記の違いはあれ、一貫して「赤髪の少女」と呼ばれていた。一方、東文研作品は、「処女後姿(半身)」「ブレハの少女」「少女の後姿」などとたびたび呼びかえられている。

照子夫人が3作品を入手してから7カ月後の、1933(昭和8)年6月3日、彼女は帝国美術院附属美術研究所（現東京文化財研究所）に、東文研作品を寄贈した。作品名は「赤髪の少女」であった[8]。東文研作品がそう名づけられた最初である。照子夫人がなぜ、そのような名づけをしたのだろうか。単なる気まぐれなのか、熟慮の結果なのか、それはよく分からない。そもそも3作品のうちで寄贈するのになぜ東文研作品を選んだのか、寄贈する意志がいつから芽生えていたのか、なども興味深い点である。おそらく、照子夫人は山中商会売り立ての時点で寄贈の考えをもち、東文研作品が3点のなかで最も優品であると考えていたのではないだろうか。だが、あくまでも想像の域を出ない。

その4カ月後、同年10月17日から31日まで、恩賜京都博物館で「黒田清輝遺作展」が開催された。出品目録によると、照子夫人は以下の2点を出品している。

11　ブレハの少女　　東京市　黒田照子氏蔵
12　アトリエー　　東京市　黒田照子氏蔵

目録にはこの2点の作品図版がないが、あきらかに「11　ブレハの少女」はBMA作品、「12　アトリエー」は鹿児島作品である。BMA作品が「ブレハの少女」と名づけられた最初である。帝国美術院附属美術研究所からは、50点が出品され、そのうち次の記載がある。

18－38　赤髪少女

これも写真図版はないのだが、東文研作品に間違いない。ここで初めて、同時に一般の眼に触れる場で、BMA作品が「ブレハの少女」、東文研作品が「赤髪の少女」と名づけられたことになった。

興味深いのは、この7年後(1940年)に隈元謙次郎が次のような記述をしていることである(下線部は引用者)。

> 此の第一回ブレハ旅行に際しては(中略)その写生帖第九号に襟のついた白い頭巾を被つた幾つかの少女像をはじめ、岩山の風景や羊の群れのゐる風景等が描かれてゐる。また油絵作品に白い頭巾を被つた少女像(美術研究所蔵)や、<u>椅子を前にし壁に椅りかかつて立てる少女像(黒田照子氏蔵)</u>或は野原に青紫色の衣を纏つた少女と黄色の帽子を被つた少年の並んで立つてゐる様を描いた「児童」(合田弘一氏蔵)等がある[9]。

隈元は注意深く慎重に、BMA作品の作品名を言明することを避けている。これは、7年前に作品名の異同が生じたことによる緊急避難的処置だったのではないだろうか。照子夫人がBMA作品を「ブレハの少女」と呼んだからこそ初めて異同が生じ、隈元が作品名を言明することができなくなったのだ。隈元の精緻で厖大な黒田清輝研究は、照子夫人の全面的な協力がなければなしえなかったものである。隈元は照子夫人の名づけに敬意をはらう必要があり、同時に、それまでの名づけにも研究者として十分に配慮することに迫られた。それが、論文中で作品名を言明することを避ける態度にあらわれたのだろう。

一方でたとえば、1942(昭和17)年、石井柏亭は『日本絵画三代志』で以下のように記述している。

> 黒田は天稟の敏感姓をもつて、画の進歩も早く、美術研究所にある前期の諸作、其の農家の一隅を写したものや、林蒐集中にあつた「画家とモデル」「赤髪の少女」「少女の後姿」や「マンドリンを持てる女」などに既に相当の完成を示している[10]。

石井が作品名の典拠にしたものは、おそらく山

中商会売り立て図録『世界古美術展覧会』である。京都での遺作展の内容は知らなかったのだろう。この時点ではまだBMA作品と東文研作品の名づけが美術界で定着していなかった様子がうかがえる。

第二次世界大戦後、ブリヂストン美術館は、1952(昭和27)年1月8日に開館した。その「開館記念展覧会」に、石橋正二郎コレクションに加えて、美術研究所より東文研作品が借用されて展示された。題名はやはり「赤髪の少女」である[11]。

一方のBMA作品は、その後まもなくブリヂストン美術館の所蔵となった。ブリヂストン美術館に残る1954年3月28日付の「入庫票」には下記のような記載がある。

ブレハの少女
買入年月日　27.7.10
買入先　黒田未亡人
価格　35万円
仲介人　美術研究所

この「買入年月日　27.7.10」は、1952(昭和27)年7月10日を意味する。開館後6カ月のブリヂストン美術館が日本近代美術のコレクションを充実させようとして、おそらく隈元謙次郎の関与によって、黒田照子夫人からBMA作品を入手したのである。照子夫人からすれば、都心に開設された美術館で、黒田作品が常設展示されることは歓迎されるべきことだっただろう。

ちなみに、鹿児島作品は同年、鹿児島市に寄贈された[12]。鹿児島市立美術館が開館する2年前になる。経緯は不明ながら、おそらく同館が開設されることを知った照子夫人が、黒田の顕彰を図って展示室に飾られることを願ったのだろう。

その2年後、1954(昭和29)年7月8日から27日まで、京橋にあった国立近代美術館において、「黒田清輝展」が同館と東京国立文化財研究所の主催で開催された。目録には記載がないが、キュレイション(監修)は隈元が担当したと推測される。これ以後、BMA作品は「ブレハの少女」、東文研作品は「赤髪の少女」という名づけが定着し、現在に至っている。

両作品の作品名の異同を来歴とともにたどってきた。現在の名づけに大きな役割を果たしたのは黒田照子夫人であり、それをオーソライズしたのは隈元謙次郎である。長きにわたって二人の緊密な連携があったことと想像される。二人が、黒田がながく日本で顕彰されることを図り、林忠正旧蔵の4作品のうち照子夫人が入手した3作品を、それぞれ、鹿児島市立美術館、ブリヂストン美術館、東京文化財研究所に寄付、あるいは譲渡した。黒田が生まれ故郷の、また活動した首都の公的機関で、初期作品が所蔵・公開されることとなったのである。黒田の出自の幸運がしばしば指摘されるが、没後も幸福な画家だったといわなければならないだろう。黒田研究にかける隈元の情熱や熟慮、黒田の顕彰に最善策を模索する照子夫人の真摯な姿には、いまも感銘を受けざるをえない。そうした歴史のなかにブリヂストン美術館の所蔵作品が位置していることも、当館にとって幸せなことだろう。

註

1) 三ツ山三郎「黒田清輝　ブレハの少女　修復報告」『修復研究所報告 vol.7』学校法人高澤学園、pp.21-23。および、三ツ山三郎「修復報告　黒田清輝《ブレハの少女》」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』35号、1987年、pp.19-20
2) 黒田清輝『黒田清輝日記』第1巻、中央公論美術出版、1966年、pp.238-239
3) 前掲『黒田清輝日記』第1巻、p.230
4) 久米桂一郎「仏国修行時代の黒田君と其制作」『中央美術』10巻12号、p.74
5) 前掲『黒田清輝日記』第1巻、p.234
6) 久米桂一郎『方眼美術論』中央公論美術出版、1984年、p.141
7) 森口多里「五姓田義松・小山正太郎・黒田清輝」『洋画研究』1933年8月号、森口多里『明治大正の洋画』東京堂、1941年、に所収(p.161)
8) 東京文化財研究所の山梨絵美子氏のご教示による。
9) 隈元謙次郎「滞仏中の黒田清輝　下」『美術研究』102号、1940年、p.185
10) 石井柏亭『日本絵画三代志』創元社、1942年、p.93(再刊、石井柏亭『日本絵画三代志』ぺりかん社、1983年、p.86)
11) 『ブリヂストン美術館50年史』石橋財団ブリヂストン美術館、2003年、p.23
12) 鹿児島市立美術館の安永めぐみ氏のご教示による。

《ブレハの少女》作品名異同対照表

<table>
<tr><th></th><th>出　典</th><th>《ブレハの少女》1891年
石橋財団ブリヂストン美術館蔵</th><th>《赤髪の少女》1892年
東京文化財研究所蔵</th></tr>
<tr><td>1908</td><td>長崎周蔵編
『林忠正蒐集西洋絵画図録』</td><td>《赤髪ノ処女》
※写真図版あり、同定可</td><td>《処女後姿（半身）》
※写真図版あり、同定可</td></tr>
<tr><td>1924</td><td>「黒田清輝先生遺作展覧会」
会期：11/5-15
会場：東京美術学校</td><td>299《赤髪の小女》1892、山中定次郎蔵
※写真図版なし
※本作品裏面に本展への出品表が貼付されている。
記載内容：
・黒田先生遺作展覧会　1924
・番号　第貳九九号
・画題　赤髪の小女
・御所蔵者　山中定次郎　殿</td><td>301《ブレハの小女》1892、山中定次郎蔵
※写真図版なし</td></tr>
<tr><td rowspan="3">1924</td><td rowspan="2">久米桂一郎「仏国修行時代の黒田君と其制作」『中央美術』10巻12号、p.74</td><td>《赤髪の小女》
※写真図版なし
※本稿は上記の遺作展の展覧会評。</td><td>《ブレハの小女》
※写真図版なし</td></tr>
<tr><td colspan="2">八室は、大体に於て日本で描かれたもの丶やうであるが、三〇一(ブレハの少女)、二九九(赤髪の少女)などはさつき話したブルタアニュの北海岸に於る製作で二九九はその題の示す如くモデルは真赤な髪を持つた百姓の子供であつたがその髪が面白いといつて描かれたものである。随分しつかりした出来ばへと思ふ。(『中央美術』)</td></tr>
<tr><td>→久米桂一郎『方眼美術論』久米美術館、1984、に所収されたときに原文が変更される。</td><td colspan="2">「ブレハの少女」「赤髪の少女」などはさつき話したブルタアニュの北海岸に於る製作で「赤髪の少女」などはその題の示す如くモデルは真赤な髪を持つた百姓の子供であつたがその髪が面白いといつて描かれたものである。随分しつかりした出来ばへと思ふ。(『方眼美術論』p.141)
※ここでの「赤髪の少女」は現《ブレハの少女》をさす。</td></tr>
<tr><td>1925</td><td>和田英作編『黒田清輝作品全集』審美書院</td><td>《赤髪の少女》1892
(No.269　山中定次郎蔵)
※写真図版あり</td><td>《ブレハの少女》1892
(No.271　山中定次郎蔵)
※写真図版あり</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1932</td><td rowspan="2">「世界古美術展覧会」
会期：11/25-27
会場：日本美術協会・常盤華壇
主催：山中商会
※山中商会の売り立て</td><td>《赤髪ノ少女》(No.386)
※写真図版あり</td><td>《少女ノ後姿》(No.388)
※写真図版あり</td></tr>
<tr><td colspan="2">※写真図版は額付き。《画家とモデル》(No.385)、《赤髪ノ少女》(No.386)、《針仕事》(No.387)、《少女ノ後姿》(No.388)は、同じデザインの額縁。
※《画家とモデル》は現・鹿児島市立美術館蔵、《針仕事》は現・石橋美術館蔵。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1933</td><td rowspan="2">森口多里「五姓田義松・小山正太郎・黒田清輝」『洋画研究』8月号
→　森口多里『明治大正の洋画』東京堂、1941、に所収</td><td>《赤髪の少女》</td><td>《少女の後姿》</td></tr>
<tr><td colspan="2">黒田の「少女の後姿」、「画家とモデル」及び「赤髪の少女」の三点は昨冬の山中商会の売立に出たから知つてゐる人も多いであらう、それを未亡人が買ひ取られたのである。いづれも滞仏中の作で、強い筆触と澄明な色調とを特色とし、「少女の後姿」では緑葉を透かしてくる外光の効果が強く美しく描かれてゐる。(p.161)</td></tr>
<tr><td>1933</td><td>「黒田清輝遺作展」
会期：10/17-31
会場：恩師京都博物館</td><td>No.11《ブレハの少女》(黒田照子蔵)
※写真図版なし</td><td>No.18-38《赤髪の少女》(帝国美術院附属美術研究所蔵)
※写真図版なし</td></tr>
</table>

1940	隈元謙次郎「滞仏中の黒田清輝下」『美術研究』102号、p.185 →隈元謙次郎『近代日本美術の研究』大蔵省印刷局、1964、に所収された際に訂正	此の第一回ブレハ旅行に際しては(中略)その写生帖第九号に襟のついた白い頭巾を被つた幾つかの少女像をはじめ、岩山の風景や羊の群れのゐる風景等が描かれてゐる。また油絵作品に白い頭巾を被った少女像(美術研究所蔵)や、椅子を前にし壁に椅りかかつて立てる少女像(黒田照子氏蔵)或は野原に青紫色の衣を纏つた少女と黄色の帽子を被つた少年の並んで立つてゐる様を描いた「児童」(合田弘一氏蔵)等がある。	※言及なし
		椅子を前にし壁に椅りかかつて立てる少女像(ブリヂストン美術館蔵)	
1942	石井柏亭『日本絵画三代志』創元社 →ペリカン社版、1983、p.86	《赤髪の少女》	《少女の後姿》
		黒田は天稟の敏感性をもつて、画の進歩も早く、美術研究所にある前期の諸作、其の農家の一隅を写したものや、林蒐集中にあつた「画家とモデル」「赤髪の少女」「少女の後姿」や「マンドリンを持てる女」などに既に相当の完成を示している。	
1954	ブリヂストン美術館「入庫票」1954年3月28日付け	《ブレハの少女》 ・買入年月日:27.7.10(※昭和27=1952年7月10日のこと) ・買入先:黒田未亡人 ・価格:35万?円 ・仲介人:美術研究所 隈元謙次郎氏の関与か。	
1954	「黒田清輝展」 会期:7/8-27 会場:国立近代美術館 主催:同館・東京国立文化財研究所	《ブレハの少女》1891	《赤髪の少女》1892